

教員養成課程における小学校教科専門「生活」の授業改善に関する基礎的検討[†]

丸山 剛史*・出口 明子*・牧野 智彦*・佐々木和也*
高山 慶子*・石塚 諭*・本田 悟郎*・井口 智文*
宇都宮大学教育学部*

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第4号 別刷

2018年2月28日

教員養成課程における小学校教科専門「生活」の授業改善に関する基礎的検討[†]

丸山 剛史*・出口 明子*・牧野 智彦*・佐々木和也*
高山 慶子*・石塚 諭*・本田 悟郎*・井口 智文*
宇都宮大学教育学部*

宇都宮大学教育学部・教員養成課程における小学校教科専門「生活」の授業改善に関する基礎的検討として、本学における取り組みに関してシラバスと受講者による授業評価を手がかりとして概括しつつ、他大学の事例を参考にして省察を試みた。他大学では大学の規模にかかわらず、教育組織として生活専修等を設けている大学もあり、ユニークな科目名・授業内容の科目を設定している大学もある。本学の場合、実施してきた授業に関しては授業評価の点数もわるくないが、受講者数が減少傾向にあるなど、再検討の余地もあるように思われる。

キーワード：生活科、教員養成、教材研究

1. はじめに

本稿は、大学の教員養成を主たる目的とした課程（以下、教員養成課程と略記）における小学校生活科に関する科目（以下、教科専門「生活」）の授業改善に関する基礎的検討であり、授業評価アンケートの結果、他大学の関係科目との比較を手がかりにして、改善のための検討課題を明らかにすることを目的としている。

周知のように、教育職員免許法は従来、小学校教諭免許状取得のために専修・一種免許状の場合は「教科に関する科目」を8単位、二種の場合は4単位を課してきた。ただし、小学校教員免許状取得希望者はすべての小学校教科に関して履修するわけではない。教育職員免許法施行規則は第4条において小学校教員免許状取得のための教科に関する科目の単位

取得の方法を規定しており、「国語（書写を含む）、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭及び体育の教科に関する科目のうち一以上の科目について修得するものとする」と記し、すべての科目を履修せずとも要件は満たされるようになっている。ただし、同条第2項において「学生が前項の科目の単位を修得するに当たっては、大学は、各科目についての学生の知識及び技能の修得状況に応じ適切な履修指導を行うよう努めなければならない」とし、各大学が履修指導に責任をもつよう規定されている。

本学では、小学校の全教科に関して、いずれも1単位で科目を開講しているが、国語、算数、社会、理科、家庭、音楽（音楽は音楽A、音楽Bの2科目を開講し、音楽Aが必修）、図画工作（図画工作A）、体育（体育A）を必修として課し、生活は選択とされてきた。しかし、同科目は幼稚園教諭免許状取得に必要な単位でもあるため、毎年一定数の受講者が存在する。本稿は、こうした本学の小学校教科専門「生活」の授業科目を検討しようとするものである。

小学校教育課程に生活科が新設されることになり、全国の小学校教員免許状の教職課程認定大学では、関係科目の設置と運営に苦勞してきたが¹、なかには生活科を専門とする大学教員を配置し、生活科専修といった組織を整えている大学もある。

[†] Tsuyoshi MARUYAMA*, Akiko DEGUCHI*, Tomohiko MAKINO*, Kazuya SASAKI*, Keiko TAKAYAMA*, Satoshi ISHIZUKA*, Goro HONDA*, Tomohumi INOBUCHI*: A basic study of improving "studies on subject matters of living environment studies" in teacher training program

Keywords: living environment studies, teacher education, studies on subject matters

* School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: marusan@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

そこで、他大学の事例も参考にしつつ、本学の事例を検討し、今後の検討課題について考察することとしたい。

2. 本学の小学校教科専門「生活」授業科目の概要

以下に、本学の小学校教科専門「生活」の概要を記す。

(1) 授業のねらい

授業のねらいは、シラバス（2017年度）「授業の内容」において次のように記されている。

「生活科教育の基盤となる社会・自然・表現などの学習的背景を捉えるとともに、生活科の活動を構成する観察・製作・表現などにおけるさまざまな「気づき」や求められる技法等を実践を通して身に付ける。また、生活科における学習概念ならびに評価の在り方をとらえ、本学教育学部附属小学校における生活科授業観察を行うなどして、学習指導案作成の手順など教育現場に直結した講義を通して生活科への理解を深める。」

この記述は、ウェブ上で確認できる最も古い2008年度のシラバスに記載された「授業の目標」と同一の文章である。2008年度以降、学習指導要領も二度改訂され、生活科の教科指導において求められることも変化し、新たな内容も付加されているので、再検討が必要になっているかもしれない。

いずれにしても、同授業科目では、1) 教科の指導内容の「背景」となる「社会・自然・表現など」、2) 生活科の「活動」、3) 生活科における学習概念、4) 生活科における教育評価、5) 学習指導案作成の手順に関して学ぶことが主な内容（＝目標）とされてきた。

(2) 授業の担当体制

授業は、教育学部教員および附属小学校教員（実地指導講師）がオムニバス形式で担当し、それぞれの担当授業において目標が明確に示され、課題等が課されることになっている。

2008年度のシラバスには教育学部教員及び附属小学校教員計8名で担当していたことが記されているが、近年のシラバスには担当教員数やすべての担当者名は記されていない。

(3) 授業計画

全15回の授業（2017年度）は、以下の内容で構成されている。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 木の実や葉を使ったおもちゃ絵
- 第3回 峰キャンパスのすてきなところ
- 第4回 おどろきツアー出発
- 第5回 家庭科と関係するテーマ
- 第6回 生活科授業参加
- 第7回 算数と関係するテーマ
- 第8回 社会科と関係するテーマ
- 第9回 年末年始家族とのつながり
- 第10回 空気抵抗をつかったおもちゃ
- 第11回 自分図鑑をつくろう
- 第12回 理科と関係するテーマ
- 第13回 保健体育と関係するテーマ
- 第14回 美術と関係するテーマ
- 第15回 まとめ

教科書は特に指定しておらず、参考書として小学校生活科の検定済教科書、小学校学習指導要領解説生活科編を掲げている。その他の教材等は必要に応じて配付されることになっている。

2008年度のシラバスでは、以下のように、現在よりも詳しく授業内容が記されていた。

- 1 「身の回りを『科学』しよう」
- 2 生活科概要・「木の実や葉を使った絵や玩具作り」
- 3 附属小で生活科の授業観察（10:30～12:00）
- 4 「生活と社会」
- 5 「にがお絵をかこう」
- 6 「身の回りの算数」
- 7 「秋みつけ ―五感でとらえて、からだで表現しよう―」
- 8 生活科概要・「峰キャンパスの素敵なおとろきところ」
- 9 生活科概要・「おどろきツアー出発」
- 10 教師の支援・「クリスマス・お正月の活動」
- 11 「『食』ってなあに？」
- 12 他教科・総合的な学習との関連・「自分図鑑を作ろう」
- 13 生活科の評価・「空気抵抗を利用した玩具づくり」
- 14 まとめ「生活科でこんなことやったよ」

シラバス入力の様子が変化してきたため、シラバスの内容が簡略化されたように思われるが、シラバスの存在意義を考えるならば、2008年シラバスと同程度に詳しく授業計画を記述したほうがよいのではないだろうか。

(4) 教育評価

それぞれの授業ごとに到達目標が示されることになっており、「生活科の授業の在り方の理解や教師の指導等における基礎能力」の有無に関して評価を行うとされている。具体的には「各授業時間のレポートや課題」が70%、「学習態度」が30%とされている。

3. 受講者の授業評価アンケートの結果

受講者による授業評価アンケート結果の過去10年分を表1、表2に示した。アンケートの評価項目

は全学部・科目統一のものである。点数はいずれの項目も5点満点である。

特に1)「受講してこの科目や関連分野に興味が増した」、2)「総合的に判断してこの授業に満足している」あるいは「総合的に判断し、この授業は有意義であった」という科目の意義や満足度を問う質問に対する評価が気になるところである。

「受講してこの科目や関連分野に興味が増した」か否かを問うた項目の評価は、4.29～4.63で推移していた。参考までに記せば、2007年度の学部全科目の平均は4.27、2016年度の平均は4.36であった。

「総合的に判断し、この授業は有意義であった」等、科目の意義や授業の満足度を問うた項目の評価も4.26～4.79で推移していた。この項目に関しても参考までに記せば、2007年度の学部全科目の平均は4.33、2016年度の平均は4.48であった。

表1. 授業評価アンケート結果 (2007-11年度)

	履修者数	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12
2007	69	4.4	4.02	3.51	4.51	4.39	4.53	4.51	4.56	4.37	4.46	4.37	4.49
2008	40	4.67	3.81	3.63	4.63	4.56	4.59	4.52	4.56	4.56	4.44	4.48	4.56
2009	17	4.47	4.47	4.73	4.8	4.67	4.53	4.8	4.47	4.67			
2010	41	4.55	4.27	4.12	4.61	4.67	4.61	4.82	4.79	4.73	4.73	4.7	4.79
2011	38	4.23	3.77	3.71	4.29	4.29	4.39	4.23	4.32	4.19	4.23	4.26	4.26

表2. 授業評価アンケート結果 (2012-16年度)

	履修者数	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
2012	25	3.21	4	4.43	4.71	4.57	4.57	4.43	4.36	4.57
2013	13	4.6	4.4	4.4	4.4	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2
2014	15	3.81	4.38	4.38	4.5	4.63	4.63	4.63	4.63	4.63
2015	32	4.63	3.78	3.44	4.7	4.78	4.89	4.78	4.93	4.67
2016	13	4	4	4.55	1.36	4.55	4.64	4.64	4.64	4.45

授業評価アンケート質問項目

2011年度以前

- Q1: この科目に意欲的に取り組んだ
- Q2: 授業の準備や復習に心がけた
- Q3: 質問点や疑問点について質問した
- Q4: 受講してこの科目や関連分野に興味が増した
- Q5: 教員(TAなどアシスタントも含む)は質問に適切に対応した
- Q6: 教員は授業内容が理解できるように努力していた
- Q7: 授業はシラバスの内容・目的と合致していた
- Q8: 教員(TAなどアシスタントも含む)は熱意を持って授業をしていると感じた
- Q9: 授業の進み具合は適切だった
- Q10: 黒板や視聴覚教材を効果的に使用していた
- Q11: 教科書あるいは資料は適切であった
- Q12: 総合的に判断してこの授業に満足している

2012年度以降

- Q1: 授業の出席について
- Q2: 授業には準備や復習を熱心に行う等、積極的に取り組んだ
- Q3: この科目や関連分野の興味が増した
- Q4: 授業はシラバスの内容・目的と合致していた
- Q5: 毎回の授業のねらい、組み立て(導入、展開等)は適切であった
- Q6: 毎回の授業の進み具合・分量は適切であった
- Q7: 教員は授業内容が理解できるよう配慮・工夫していた
- Q8: 教科書、資料、黒板、視聴覚機器等の使用は適切であった
- Q9: 4～8を総合的に判断し、この授業は有意義であった

受講者の授業評価はわるくないと思われる。

しかし、表1および表2に記載したように受講者数が減少傾向にあり、この傾向をどうみるかは検討を要するところであると思われる。

4. 他の国立大学における生活科教育

2017年10月時点において教員養成を主たる目的とした課程を有する国立大学・学部は44大学存在する。このうち、小学校生活科に関して専修ないしはコースを設けて学生を受け入れる組織を有しているのは、愛知教育大学と香川大学教育学部の2大学・学部である。以前は、奈良教育大学、福岡教育大学等にも生活科教育専修、生活・総合専修といった教育組織が設けられていたが、近年の組織改編により現在では上記2大学のみとなった。

愛知教育大学は、初等教育教員養成課程に生活科選修が設けられ、募集人員は「10名」と記されている。香川大学教育学部は学校教育教員養成課程に「小学校教育コース」が設けられており、同コースの下部組織として「生活・総合領域」が設定されている。入学者選抜の段階で募集人員を設定しているのは愛知教育大学のみとみられる。

以前は、生活科教育を専門とする教育組織を設けるのは、規模の大きい大学・学部であるとみられてきたが、近年では規模とは関係ないようであり、今後、教育組織のあり方を検討してみることも必要かもしれない。

また、他大学の教育実践例も大学紀要等に掲載されている²。鹿児島大学では、2003年時点であるが、長谷川雅康ら技術教育担当教員集団が選択必修で生活科の教科専門科目を担当し、「くらしと技術」という授業科目を設定していた。内容も工夫されており、(1)紙（紙漉の道具を作り、紙漉をする）、(2)栽培（枝豆またはミニトマトの栽培）、(3)刃物（刃物の研ぎを含む）、(4)生活と木材、(6)生活科の実践例、(7)まとめとして：ものづくりの意味、脳科学等の成果と手・身体を使う学習の意義、体験的学習の意味、などを主な内容とし、他の実践例やシラバスにはみられない独自の内容も含まれている。受講生にも好評のようであり、参考にしたい。

5. おわりに

以上のように、本学の小学校教科専門「生活」はこれまで受講者には好意的に受け止められてきたと

考えられるが、他大学の取り組み状況や近年の受講者数などを考えると再考の余地もあると思われる。

参考文献

¹ 設置当初の動向に関しては、高瀬一男「教員養成大学・学部における生活科の動向」（『茨城大学教育実践研究』第10号、1991年、125-136ページ）、三石初雄・浜島京子「教員養成系大学・学部における『生活科』関連授業の実施状況」（『福島大学教育実践研究紀要』第21号、1992年、103-112ページ）などに詳しい。近年の状況に関しては、鈴木隆司「我が国の教員養成・大学における生活科関連科目の教育に関する一考察」（『技術・職業教育学研究室研究報告』第2号、2005年、32-40ページ）を参照されたい。

² 長谷川雅康「小学校教員養成における生活科関連科目の実践——体験的ものづくりを中心とした「くらしと技術」の授業——」（『技術教育研究』第63号、2003年、52-60ページ）。佐藤史人・今村律子「和歌山大学の教員養成における「生活科」教材開発」（『和歌山大学教育学部紀要 教育科学篇』第54号、2004年、167-174ページ）など。

平成29年10月31日 受理

A basic study of improving “studies on subject matters of living environment studies” in teacher training program

Tsuyoshi MARUYAMA*, Akiko DEGUCHI*, Tomohiko MAKINO*, Kazuya SASAKI*,
Keiko TAKAYAMA*, Satoshi ISHIZUKA*, Goro HONDA*, Tomohumi INOBUCHI*

* School of Education, Utsunomiya University